

# おおさか ちゅういちだんし ぶんらく ししょう でのし い そうごうがくしゅう えん 大阪の中 1 男子、文楽<sup>1</sup>の師匠に弟子入り 総合学習が縁

しょうがっこう じゅぎょう で あ ぎだゆうぶし<sup>2</sup> みせられて、おおさか ちゅうがくせい ぶんらく せかい と 飛び込んだ。1 日、師匠と師弟関係を結ぶ儀式「お盃（さかづき）」の臨み、「豊竹咲寿大夫（とよたけさきじゅだゆう）」の名前をもらった。文楽に縁のない家庭から師匠に直接弟子入りするのは、異例という。

おおさかしちゅうおうく 藤田龍平君（13）は市立南中学校の1年生。週末になると、自宅から徒歩5分ほどの国立文楽劇場へ行き、豊竹咲大夫さん（58）の楽屋<sup>3</sup>に控えている。師匠のかばんを運んだり、帯を畳んだり、身の回りの手伝いに励む。

藤田君は市立高津小学校6年生だった昨年、学校で文楽を実演した。国立文楽劇場がある場所に以前校舎が立っていた縁で、同小は総合学習に文楽を採用する。昨秋あった発表会で袴（かみしも）<sup>4</sup>をつけた太夫<sup>5</sup>として、牛若丸<sup>6</sup>と弁慶<sup>7</sup>が登場する「五条橋の段」や「二人三番叟（さんばそう）」を語った。

藤田君は幼稚園児のころから時折両親に連れられ、「西遊記」など子供向けの文楽に親しんだ。実際に太夫を経験してみると、「微妙に声の調子を変えるのが難しいけれど、登場人物になりきって見ている人を感動させるのが楽しい」。その面白さに自覚めた。

父尚史さん（42）は会社員、母礼子さん（43）はピアノの先生で文楽の世界とは無縁。だが両親は「目標を持つのは素晴らしい」と応援してくれ、本格的に芸の道に飛び込む決心をした。

文楽の道に入るには国立劇場の研修制度がある。現在23歳と24歳の2人がいるが、中学を卒業しないと研修生になれない。卒業まで待ちきれない藤田君は、小学校で指導してくれた豊竹咲甫大夫さん（27）の師匠咲大夫さんの門をたたき、4番目の弟子になった。

本格的なけいこはこれからだが、藤田君はもうどっぷりと文楽に浸っている。お風呂で「はよお殺して……」と「曾根崎心中」のお初を語って両親をドキッとさせ、「二人三番叟」をBGMに試験勉強をしている。

「お盃」に臨んだ藤田君は緊張気味に師匠と盃を交わし、「良い太夫になるようにがんばります」と話した。「名前を良くするのも悪くするのも君次第だ」と励ました咲大夫さんは、「大阪の子が大阪の芸である文楽を継いでいくのはうれしいこと」と顔をほころばせた<sup>9</sup>。（06:33）

<http://www.asahi.com/culture/update/1202/002.html>（アサヒドットコム 12月2日より）

- 1 義太夫（代表的な浄瑠璃の一派）による人形浄瑠璃（操り人形の芝居）
- 2 =義太夫（貞亨元年(1684年)初代竹本義太夫が創始した浄瑠璃の代表的流派）
- 3 舞台の裏側にあつて、出演者が化粧や着付けや休憩をする部屋
- 4 上下、つまり上着と袴
- 5 狂言(能楽のあいまに演じる滑稽と諷刺を主にした舞台芸術)や浄瑠璃を演じる者
- 6 源義経(1159-89)の幼名
- 7 源義経がとても信頼をしていた家来の武勇僧
- 8 中国の小説(明の呉承恩作)
- 9 ほころぶ：うれしくて、思わず歯を見せてにっこりすること